札幌市教育文化会館情報誌「らく」

2013.2

30

楽

Sapporo Education and Culture Hall News

RAKU

北に眠る、
もうひとつの物語
オホーツク文化

札幌市教育文化会館

札幌市教育文化会館情報誌「楽(らく)」は舞台芸術を気軽に
楽しんでいただきたいという思いを込めて名付けられました。

OKHOTSK

北に眠る、もうひとつの物語
オホーツク文化

「北海道の人というのは、どうも心の輪郭が本州人よりも一まわり大きいようだ」とは、日本をすみずみまで歩いた作家・司馬遼太郎が、北海道の人々との思いを記した一文です。司馬は幻と言われた海洋民族の足跡をたどるため北海道に赴き、その足で見聞きしながら、民族の文化を作家ならではの視点で紐解いていきました。

その謎多き文化が「オホーツク文化」と呼ばれるもの。北海道の北部から東部、サハリン南部から南千島に、6世紀から10世紀にかけて、オホーツク海沿岸を中心に栄えた文化です。鮭や山のものを採集して生活していたアイヌとは異なり、オホーツク人は主に海を狩猟の場としてトドやアザラシなどの大型動物や魚を捕らえて生活していました。時にはクジラさえも狩猟する、勇ましい民族だったと言われています。

そんな人々がなぜ「幻」と言われているのか。それは、彼らがどこから来て、どこに行ってしまったのか、多くのことが明らかにされていないからです。

大正2年に網走のモヨロ貝塚で発見された出土品の数々は、これまで発見されてきた弥生文化とも縄文文化とも違っていました。人骨の特徴も、埋葬する方法もそれまで北海道では発見されていないものでした。また豚を飼育する文化があったことや、土器からぶどう酒の成分である酒石酸（しゅせきさん）が発見され、ワインのようなものを飲んでいたこともわかっています。そんな発達した文化を持ちながら、いつしか歴史から姿を消してしまったオホーツク人。

ある俗説では、民族移動をしたともアイヌ文化に吸収されたとも言われ、現在もその謎を解き明かすために研究は続けられています。

海と共に生き、船出する勇気を持っていたオホーツク文化の人々。「北海道人の心の輪郭は、一まわり大きい」という司馬の言葉は、島国日本を飛び越して、大海を見続けたオホーツク人の記憶が、北海道でかすかに息づいていることを感じ取ったからなのかもしれません。

【参考文献】
宇田川洋『北海道考古学教室6 謎の海洋民族』 一光社 1984年
司馬遼太郎『街道をゆく38 オホーツク街道』 朝日新聞出版社 2011年

［沢 則行 インタビュー］

北方討伐に向かう男と、北の楽園を守る女。謎めいたオホーツク文化から紡ぎ出される物語を能舞台で。

この物語のアイディアは10年以上前からずっと実現したかったものなんです。オホーツク人は6人乗りの船を操り、シャチやトドを仕留めて肉を食べ、ワインも作っていたような民族です。しかし、そんな猛々しい人たちが忽然といなくなってしまった。いまだになぜその文化が失われてしまったのかは解明されていないのですが、ひとつの仮説として、僕が想像したのが今回の物語です。

オホーツク文化の時代は長く1000年ほどの歴史があったようです。その間に皇極天皇という実在の女帝がいたのですが、北方討伐を行うということで、これも実在する阿倍比羅夫を何度か北海道に向かわせているんです。最終的には30〜40隻の船を従えて討伐に向かったとも言われています。

物語のきっかけは北方討伐に向かった阿倍比羅夫が巨大な魚に飲み込まれてしまうことから始まります。物語のオホーツクの女長（おんなおさ）は勇壮で、漁にも出る。そして、たまたま阿倍比羅夫を助け、そのうち二人は恋に落ちてしまうんです。助かった阿倍比羅夫はいちど朝廷に戻りますが、皇極天皇に厳しくいさめられてしまう。そして…そんなストーリーを今は考えているんです。ただ、物語を作っていく上で、展開が少々変わるかもしれません。

この物語とちょうど同じ時代には、「能」の原型となる猿楽が発達し、宮廷文化として育っていきます。朝廷の象徴である能舞台の上で、勇壮なオホーツク人や巨大な魚が暴れ回る。制圧する側と抗う側の関係を視覚的にも表現していけるかもしれないですね。

地図を逆にしてサハリンからたどって見ると、北海道は大陸の続きであり、最終地のようにも見えます。しかも北の人間から見れば、北海道は一番南に位置するわけですから、そこはきっと「終わりの楽園」のようであったと思うんです。終の棲家として北海道に移住してきたオホーツク人は今はもういないのですが、北海道の人たちにはひょっとしたらその勇壮な血がどこかに残っているかもしれない。

「OKHOTSK（オホーツク）」は女長の骨の記憶が語り出す、悲しい恋愛物語ですが、ただ悲しいだけではなくどこか勇気の持てるような作品になればと思います。

［人形劇師］沢 則行
Noriyuki SAWA

小樽市出身。北海道教育大学特別教科（美術・工芸）教員養成課程卒。1991年に渡仏。92年に文化庁在外研修生で、チェコへ。プラハを拠点に、世界各国で公演。また、チェコ国立芸術アカデミー演劇・人形劇学部、米国スタンフォード大学演劇学科、シカゴ大学、ロンドン人形劇学校など、多くの教育の現場で講座、ワークショップを指導した経験を持つ。国際的受賞多数。

［フィギュアアート × 能舞台］

OKHOTSK
オホーツク　　終わりの楽園

作・出演 ／ 沢 則行

2013年3月9日［土］ ①14:00開演 ②18:30開演
10日［日］ ③14:00開演

札幌市教育文化会館 大ホール（能舞台）

全席自由 3,000円（教文ホールメイト・KitaraClub 会員 2,500円）
※割引チケットは教文プレイガイドのみの取扱となります。

［チケット取り扱い］
教文プレイガイド tel.011-271-3355
ほか市内プレイガイド

〈 あらすじ 〉

遠い昔、彼らは北の海を渡り、ようよう大きな島にたどり着いた。たくみに銛（もり）をあやつり、海獣を仕留める。森ではヒグマを狩り、ワインを醸造し、美しく自由な彫刻を削り出す。首の折れた女神、笑うクマ、蛙の文様…そして仲間が死ぬとその身体を折り曲げ、なぜか頭に大きな壺を載せて葬った。とても豪胆、なんだか繊細。

島の海岸線で比類のない文明を築いた彼らは、やがてどこかへ忽然と姿を消し、楽園は唐突に終わりを告げる。…それから千五百年。残された滅びの骨がゆらゆら蘇るとき。「今」に迷うぼくたちに、もう一度新しい航路を示すために。

Dance Symposium

［札幌市教育文化会館 平成24年度ダンスシンポジウム］

ダンスコミュニケーションの拡張

平成25年2月16日(土)14時～ 17日(日)13時～
札幌市教育文化会館 リハーサル室A

経験、年齢、性別に関わらず誰もが気軽にダンスを楽しみ、踊ることの楽しさを地域で共有する「ダンスコミュニケーション」。札幌市教育文化会館では平成24年2月18日、19日の二日間にわたり「ダンスコミュニケーション」についてのシンポジウムを開催しました。北九州芸術劇場のダンス事業の紹介、北海道におけるアーティスト・イン・スクール事業の紹介とともに参加型ダンスワークショップを行い、好評のうちに終了しました。

今年のシンポジウムは「ダンスコミュニケーションの拡張」と題し、世田谷パブリックシアターの清水幸代をコーディネーターに世田谷の活動を紹介。また、函館市芸術ホールの担当者による「函館市によるダンスコミュニティづくりの取組」を発表し、各地の事例からディスカッションを行います。

さらに、ほうほう堂の新鋪美佳を招いてのダンスワークショップを開催。教文コミュニティダンス部による成果発表、活動報告も行われる盛りだくさんの内容です。

「世田谷パブリックシアターの取り組みや、ほうほう堂新鋪さんの活動を中心に紹介していきます。参加者の皆さんと、コミュニティにおけるダンスの役割についてディスカッションしていければと思います。また、ほうほう堂のダンスは日常的かつ具体的な動きを積み重ねて作品をつくっていらっしゃいます。ワークショップを通してダンスに関わりが少ない人達にもダンスの楽しみを知ってもらう。そんなコミュニケーションのあり方について考えていければと思います」と清水幸代さん。

札幌とダンスの新しい一歩につながるシンポジウムになりそうです。

PROFILE

新鋪美佳（アラシキミカ）

ダンスデュオ「ほうほう堂」の一人。2004年「東京コンペ#1」でケラリーノ・サンドロヴィッチ賞、05年「トヨタコレオグラファーアワード～次代を担う振付家の発掘～」オーディエンス賞受賞など、国内外で注目され、舞台作品以外にも日常的な場所で即興的にダンスを展開する「ほうほう堂@」シリーズを発表し続けている。
http://hoho-do.net

インタビュー

ダンサー・振付家
［ほうほう堂］

新鋪美佳

劇場を出て、フラットな状態で人やものと関わりたい。

ほうほう堂は電車の中やスクランブル交差点、時にはジンベイザメやジャンボサボテンなど、劇場以外のさまざまな場所やものと踊る「ほうほう堂@」シリーズをここ数年精力的に続けているダンスユニット。

「@シリーズは、劇場に来られない人、ダンスに興味がない人にも見てもらえる、通りがかりの人と出会える嬉しさがあります。劇場外に、劇場で踊る時と同じ様なダンスを持ち出すと場から浮いてしまうというか、関係が持てなくなってしまうんです。見ている人も共感できないかもしれません。ですからできるだけダンス以前のフラットな状態で、その場で見たり聞いたりした事と具体的に関わって、遊ぶようにダンスを楽しんでいます。たとえば段差があったら、その段差を利用して飛び上がったり、傾いてみたり、風がふいてきたら、髪が風になびくのを動きに利用したり、その場所だからこその条件や状況ととにかく具体的に関わってみます」

たくさんある日常の動きの中からおもしろいと感じる動きを取り入れ、磨かれたダンスの技術で時にはコミカルにポップに即興を作り上げていくセンス。通りすがりの人の目をうばって立ち止まらせ、コミュニケーションを展開していくほうほう堂は新しいダンスの道を切り拓き続けています。

「札幌で@シリーズのようなダンスをやっている方がいるかはわかりませんが、ダンスによるコミュニケーションは様々な方法があるのだと思います。シンポジウムで一緒に考えていければと思います」

教文ワークショップ レビュー

Kyobun Work Shop

#06

演劇、オペラ、ダンス。知れば知るほど深まっていく舞台の世界。「観ているだけじゃつまらない」「実際に体験してみたい」そんな皆さまの好奇心にお応えするのが札幌市教育文化会館のワークショップです。

能楽入門ワークショップ

日本の伝統芸能「能」を知る、参加しやすい日程と形式のワークショップ。
実際に面や装束に触れ、扇を使って動き、声を出してみる体験講座です。

観世流シテ方能楽師角当直隆さんによる分かりやすいレクチャーに興味深々の受講生。

興味がある、と思っても舞台を観るだけでは、なかなかわからないことが多い能。そもそも能ってなんだろう？もっと能のことを知りたい！という初心者のために開催されたのが「能楽入門ワークショップ」です。

観世流シテ方能楽師・角当直隆さんが講師として2日間にわたって能の基本から教えてくれるワークショップに、20代から70代まで幅広い年齢の27名が参加しました。

1日目に教わった演目は「羽衣」。能の種類や能舞台の仕組み、謡本の見方などの基本を織り交ぜながら、実際に声を出して謡や舞を学びました。演じるにあたって必要な能の基本動作である「すり足」、能の中から見せ場となる舞を抜き出した「仕舞」の所作の一部を体験。普段の歩き方とは姿勢から違う「すり足」に、参加者は戸惑いながらも熱心に取り組んでいました。

2日目の演目は「船弁慶」。まずは謡本を見ながら声を出し、場面理解を深めていきました。前日に学んだ「すり足」や「仕舞」も復習し、1日目は見るだけだった「面（おもて）」を着ける体験もありました。能では「面」をとても大切にしていて、着ける前には「お願いします」、はずした後には「ありがとうございました」といった畏敬の念を持って面に接すること、と角当さん。能の型や動きだけではなく、能にとって大切な「心」も参加者に伝えます。

講師による「船弁慶」の舞を間近で観賞することで能の迫力や演者の真剣さを感じたり、主役であるシテ方は舞うだけではなく、鬘（かつら）などの小道具や大道具を製作することなども学び、能について幅広く知るワークショップとなりました。